

稱讚 二六八号

二〇二五年四月一日発行

これより西方に、十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽といふ。その土に仏まします、阿弥陀と号す。いま現にましまして法を説きたまひ。

舍利弗、もし善男子・善女人ありて、阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持すること、もしは一日、もしくは二日、もしくは三日、もしくは四日、もしくは五日、もしくは六日、もしくは七日、一心にして乱れざれば、その人、命終のときに臨みて、阿弥陀仏、もろもろの聖衆と現じてその前にましますん。この人終らんととき、心顛倒せずして、すなはち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得。

『仏説阿弥陀経』

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com



2025年3月31日 所沢にて

二〇二五年度 稱讚寺門信徒会費 年会費 六千円

①振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会

代表 北村 信也

□座 普通 6176051

②振込先 ゆうちょ銀行

名義 北村信也

店名四四八 普通 □座2374851

三月二十三日(日)、稱讚寺の春のお彼岸法要を福井恒彰さんの一周忌法要を兼ねておつとめいたしました。

おつとめは、『仏説阿弥陀経』・『宗祖讚仰作法』を誦誦いたしました。

この度では、住職の町会自治会連合会で縁を頂いております宿松さんが初めてお参りにきてくださいました。

そして、早崎光弘さん、山下陽子さん、中木原乃既子さん、代志子さんも参拝くださいました。

ご参拝、ありがとうございます。

最初、福井さんのお話をさせて頂いたのですが、二月入院を知ってから、三月にお亡くなりになられたことを知るまでの間、「自力無効」という類いではなく、何かするべきことがあったのではないかと考えてしまいますと、お話いたし、それでも、ただお一人で誰にも看取られることなく、寂しかったのではと私の方は思っています。福井さんご本人は、きつと日頃から、奥さんは西方の阿弥陀さまのお浄土に往ったんだよねと仰っておられましたから、きつと、そうなんだと思うようにしておりますと言っことをお話させて頂きました。

お浄土というのが、現実には宇宙の何処かの場所としてあるわけではありません、次元の異なる世界・場所でもないことはわかっているはずなのですが。

そのように表現しようがないのが、私たちでありましょう。

「これより西方十萬億仏土を過ぎて世界あり、名づけて極樂という。その土に仏まします。阿彌陀と号す。今現にましまして法を説きたもう。」〔阿彌陀經〕に説かれています。

「十萬億仏土」とは、ある数学者が計算したところ、光の速さで10京年経ったところだそうです。到底人間の力では行くことが出来ないところだ。す。「十萬億仏土」を別な表現をすると、「三千大千世界」という言葉もあります。どの世界にも仏さまがお一人おられる。その世界を「小世界」と言います。その小世界が千集まって「中世界」です。中世界が千集まって「大世界」です。大世界が千集まって「三千大千世界」となります。つまり、宇宙全体を言っておられるのであります。無辺・無限をも意味します。



をも表現しているのではないのでしょうか。

「私の世界」とは、ただ私が知り得る、触れ得る世界のことではなく、私からは知り得ない、触れ得ない世界からも因(縁)つて成り立っている私を言うのだと思います。

私からは到底行き着けない、わかり得ない世界であるのです。

その世界を「名づけて極樂と言う。」と。誰がその世界を極樂と名づけたかというところ、お釈迦さま以外におられません。お釈迦さまが「極樂」と名づけたのです。そして、「その土に仏まします、阿彌陀と号す。」と仰られます。今度は「号す」と表現されています。「仏土」は「極樂」と名づくことお釈迦さまが名づけたが、「仏」は「阿彌陀と号す」となって、明らかに違いがあります。お釈迦さまが「阿彌陀と名づけた」のではないのです。仏自ら「私が阿彌陀(南無阿彌陀仏)です」と名告られたということを頭わしています。

仏教で「一切の法」という「宇宙万有森羅万象」のことではなくて、「私のおっしゃってられることである」ということである。また思い尽くすことも出来ないところから、既に阿彌陀さまの方から私のところに來たつて、大慈悲を内紹晃氏著)はたらいておられることを知らせておられるので、とからすると、

私の外に向かつてのお浄土との距離を表現しているのではなく、私の心の奥の意味が込められているとお話しました。が、どうも「西」の上の字「一」は羽を広げているようにしか見

えません。くつろいでいる、安心しているようには見えないなあと思っていたところ、左の写真を見てハッとさせられました。親鳥が自分の子どもも雨や雪から濡れないように自分の羽を広げて守っているのです。CGっぽいのもあり、本当かなあと思ってしまうところもあるのですが、「安心」するとは、私がそこへ行かなければ得られないものではなく、実は「安心」は、お浄土から、阿彌陀さまの方から、届けられているということなのではないかと思ひ、お浄土とは場所を単に頭わしていないことを更に気付かされるのであります。



「仏説阿彌陀經」には「善男子・善女人」とお釈迦さまが呼び掛け、「南無阿彌陀仏を称えなさい」と勧められています。「善男子・善女人」とは誰のことでしょうか。自らの力で仏を目指せる方々です。いつの間にか、お念仏する私を「善男子・善女人」の仲間にしていませんか。

曇鸞大師は、何故「西の阿彌陀さまだけ礼することと尋ねられて、自分は智慧浅いから、全ての仏さまを一応に礼する事は出来ないから」と言われました。浄土教の高僧は皆「愚かき」を自覚されます。法然聖人は「浄土宗は愚者になりて往生す」と仰いました。

親鸞聖人も「罪悪深重の凡夫」「凡愚」「悪人」と自覚されておられました。

果たして、この私に自分を「凡夫」と真摯に捉える事が出来るでしょうか？ そうできないならば、救われたいのでしょうか？

そういう私に心強い言葉が「お正信偈」の「還來生死輪轉家決以疑情為所止」のお言葉です。

『親鸞の人生観』

教行信証真仏弟子章

金子大榮 法蔵館 一九六六年初版

七 説聴の方軌

本文『安樂集』には、諸部の大乘によりて、説聴の方軌をあかさば、『大集経』にのたまはく、「説法のひとにをいては、医王のおもひをなせ。跋苦のおもひをなせ。所説の法をば、甘露のおもひをなせ。醍醐のおもひをなせ。それ聴聞のひとをば、増長勝解のおもひをなせ。愈病のおもひをなせ。もしよく、かくのごとき説者・聴者は、みな仏法を紹隆するにたえたり。つねに仏前に生ぜん」と。乃至

口語訳 『安樂集』にいう。説聴の方軌に就て。『大集経』にいう。法を説く者は、医王の想を作し、苦を抜く想をなせ。その説く法を甘露のおもひ、醍醐とおもえ。法を聴く者は勝解の増長を想い、病の癒えるをおもえ。しかれば説者と聴者とみな仏法を興隆するものとなり、常に仏前に生まれるであらう。

一

真仏弟子の智徳を説く経文について、これからは高僧の領解である。そのはじめにあげられたのは

道綽の『安樂集』であつて、ところどころ「乃至」とあたかも一つの長い文章を略抄せられたようにみえる。されど、実はそれぞれ別の処にあるものを集められたもので、その内容もまた一つではない。しかるにそれを連引せられたのは、全ては念仏者の功徳に他ならぬからであらう。したがつて説聴の方軌を明かすものは、ここではただはじめの『大集経』の説だけである。

その経文は六つの「想をなせ」で成立している。そのうちはじめの四想は説者の用意であり、のちの二想は聴者の心得であるにちがいはない。すなわち、法を説く者は自身を医王として聴者の苦を抜くものであり、その説く法は甘露であり醍醐であると思ふべきである。それに対して聴者はその法を聞いて勝解を増長し、病の癒える想をなすべきであるということである。

しかるにそれがそれで済まされないものがある。それは原文の聴法者を「聴法のひとをば」と訓読してあることである。このをばの語感から推せば、後の二想は説法者の聴聞者に対する用意であり、これに対して前四想は返つて、聴法者の説法者と法とに対する心得のように想われる。それは自身を説法者の位置に置いて考えない親鸞の心として、如何にもと領かれぬことはない。しかしそうなれば前四想は領解されるが、後二想はさらに不自然に感ぜられぬであらうか。

そこで六つの想いを全て聴法者の用意として領解すべきであるという先進の説がある。されどそれは聴法者をばの訓を聴法者自身をばと解さねばならぬ無理があり、さらに「説者・聴者はみな仏法を紹隆」という経説に相応せぬものである。それにも拘わらず、この先進の説には心引かれるもの

がある。それはおそらく、説者・聴者を分くる経意にも反くものではないであらう。それで私は、経説と祖意との相応を念じつつ、解釈してゆきたいと思ふのである。

二

如来は医王であり、善知識は良医である。このことは親鸞にも深く感じられていたのであらう。『教行信証』にも所々に出ていることである。たとえ病に身・心の別があつても、治療のところに別はない。身心は一如であるから、身に病あるときには心に痛みがあり、心に悩みあれば身に苦あるは事実である。それがかつては惑病同源を説ける学僧あり、今日では精神医学の分野が広められることとなつた所以であらう。こうして病気を治すことは病人を治すことでなければならぬということとなつた。しかし、そうなれば良医は必ず真実なる人間観を有つものでなくてはならぬということになるであらう。また真実なる人間観を有つ教家は、おのずから良医の徳を備うる者であらねばならない。抜苦ということも、その良医によりて行われるのである。

その実例として説かれたものは、阿闍世王の獲信の物語である。阿闍世は身に難治の病の発生したことを、かつて父王を殺せし罪惡の報いと感ぜざるを得ないのであつた。しかるにそれを慰諭せる六師外道は、すべてその病源に徹することができなかった。したがつてそのしは正しい人間観でなかつたために、ただいたずらに阿闍世の道念を麻痺せしめようとするものとなつたのである。それは要するに真実に人間苦を知らないものであつた。

しかれば精神治療とは思想的に病人の神経を

麻痺せしめることではない。その病源を明らかにすることである。それは心苦を一層深くせしめるかも知れない。それどころかその心苦の根源に道念のあることを知っている良医は、決してその治療を誤ることとはないであろう。阿闍世にとりてその良医となるものは耆婆であつた。耆婆は阿闍世の心病の根源に慚愧心あることを見出だして、その道念を世尊の教えへと導けるのである。それが不思議にも世尊の月愛三昧の光を受けて、まず身病を治し、ついで心病を治することとなつたのである。

ここには人間の病を治療しようとするものは、必ず病人の道念を喚起せしめねばならぬということがあるようである。病人の憂悩するものは、生きる望みの失われることである。その憂悩を除去するためには、ただ失望するにおよばないことを保証するだけでは十分ではない。その憂悩を道念に高めて、自ずから憂悩を解脱せしめるものでなくてはならぬのである。

人間の苦悩をすべて生存欲にのみよるものと思ふことは、人間みずからを侮辱するものである。いかなる苦悩も、それが人間としての苦悩であるかぎり、その根源には知られていない道徳心があるのである。その道徳には大悲同感してのみ人間の苦悩は除去されるのである。しかして、その大悲同感の心あるものこそ、医王による治病に他ならぬのである。

三

病は「治る力」と「治す力」と相待ちて癒やされるということである。したがって「治す力」といつても「治る力」の助成をもつて理想とすべきものであろう。しかれば仏教に応病与薬ということも道念の

力を生起せしめるものにはかならない。これによりて『涅槃経』には諸仏の説法に軟語やわらかと呵責きびしとがあることを説き、また良医は風・熱・水の三種の病相を治すことに寄せて、諸仏に貪欲・瞋恚・愚痴を除く法あることが説かれていた。それを親鸞は「教行信証」化身土巻に引用していることは特に善知識の教化に信順すべきことを明らかにするためである。されど、その三種の病も「無碍光仏のひかり」により、ただ念仏三昧によりて治癒されるのである。それによりて身心安楽となるのである。

これによりて「所説の法をば甘露の想をなせ。醍醐の想をなせ」という経意が窺われる。甘露は長生不死の妙薬と言われている。それは生命の根源を養うものであろう。「涅槃をまた甘露と名づく」と説かれている。その甘露の門を開けるものは、如来の大悲・大智である。しかれば「甘露のおもい」とは、無生法忍を得るよろこびにかなならぬであろう。長生不死というも、いたずらに年齢を加えることではない。聞法のありがたさは、即今の一日に永遠の寿命を内感せしめられることである。

醍醐もまた涅槃の味をもつものである。これは牛乳を精錬せるものであるが、これを服すれば一切の病が治るといふことである。しかるにその一切の病を治するといふことについては、また阿伽陀薬といふものがある。それは、大信海が頓、漸、定、散、有念、無念、多念、一念、等に、分別するべきものでないことにたとえられて「阿伽陀薬のよく一切の毒を滅するがごとし。如来誓願の薬は、よく智慧の毒を滅す」と説かれてある。しかれば、醍醐が一切の病を治すといふことは、すなわち「よく智慧の毒を滅す」ことであろうか。病は愚かきにのみあるのではない。智に執えられるところにも毒がある。そ

の病毒の除かれたるところに、身意柔軟があるのである。

しかるにその阿伽陀薬とは無病不死の薬ということであつて、別にその名の薬があるのではない。とすれば甘露といふ醍醐といふものが、すなわち阿伽陀薬といわれるものであろう。したがってまた薬といつても、ただ病を対治するものではなく、心身を養う食べ物である。仏教に薬物といふは食物であるといふことであらう。しかれば甘露といふ醍醐というも、特に日常の食物としての美味さというものが思われているのであろう。煩惱動乱の人間生活をして大涅槃へと帰入せしめる、その妙味を与えられるものが聞法の利益である。

四

これによりて聴法者には増長勝解と癒病との想いがあらわれる。増長勝解とは、さきの経説にある廣大勝解である。よき判断の智慧が生ずることである。それが外他のものにとらえられる病を癒して内なる生命に満足せしめるのである。

私はそこで親鸞が「難化の三機、難治の三病は、大悲の弘誓をたのみ、利他の信海に帰すれば、これを矜哀して治す。これを憐憫して療したまう。たとえば醍醐の妙薬の一切の病を療するがごとし」と言える領解を思い合はせる。「難化の三機」とは五逆と謗法と一闍堤とである。道徳無視と宗教無用と、宗教無関心との三者である。この三者は難治の三病であつて、いかなる良医も治療することができない。それは自身は病人であることを知らないからである。

仏法を説く者も、その教化しうるものは、道徳に悩む者と、正しき人生観を求めざる者である。

その求道の心なきものを、どうして教化し得るであらうか。ここをもって如来の本願においても、「ただ五逆と正法を誹謗するものを除く」と言っている。これは如来の悲願は、ひとえに苦悩の群生にかけられていることを願わすものであらう。

しかるに逆・謗の衆生は苦悩を知らない。そのかぎり、それは縁なき衆生と言わねばならぬのであらう。

されど無限の大悲より言えば、この逆謗の者こそ救われねばならぬものである。病ありながら無病であると思わているものほど、危ういものはない。

ここにはその人に有病をもししらせねばならぬ教法と、健全と誤認している病人との対決とも言わねばならぬ。この対決の行われるものこそ、「説聴の方軌」というものであらうか。

本願には逆謗を除くと願わされている。しかるに親鸞はその逆謗のものをこそ本願の正機であるとして領解せられた。私はその思想の矛盾を解決することができない。されど真に正法から除かれるものであると自覚せざるかぎり、如来の悲願を信樂し得ないことは事実である。ここには無限の大悲と無限の懺悔との呼応があるのである。

五

こうして「説者・聴者は、みな、仏法を紹隆することとなるのである。説者は自身が説けばこそ法は広まるものと思わている。されどいかに説く人があつても、聴く人なくば法は広まらない。その事実から言えば、仏法の興隆は聴者の増加によることは明らかである。しかれば聴者ありて説者もまた仏法の興隆に参加するものである」といってよいので

あらう。

といつても説者なしには聴者はあり得ない。ここには説者によりて聴者がよびだされるのであるか、それとも聴者の要求に応じて説者があらわれるのであらうかという課題がある。しかし説者と聴者との関係は、決して人間的馴れ合いではない。それは説法と聴法という同法の因縁においてあるのである。その法縁が見失われるれば教団の繁栄があつても仏法の興隆とはいえないのであらう。この意味において仏法を興隆するものは、仏法そのものにはほかならぬのである。

しかれば「つねに仏前に生ぜん」という経説もその意にて領解すべきものであらう。それは浄土に生まるる身となるということである。説者も聴者もともに一如のさとりをひらく身となるということである。まことに仏法の興隆というも、その信証のほかにはない。そこに法縁による人縁のようこびがあるのである。

浄土真宗のビハーラケアを考える

親鸞の念仏思想

岡 亮二氏著

5 真の仏弟子―獲信の念仏者

「南無阿弥陀仏」とは、阿弥陀仏自体の、われら一切の凡愚を撰取したもう、大悲躍動の相であつた。されば念仏者は、常に、まさしく阿弥陀仏と一体となつているといわねばならない。阿弥陀仏自身、わが心に徹入していればこそ、私自身、念仏を

称える身でありうるからである。私が念仏を称えるから、阿弥陀仏がわが心に來たるのではない。真実清浄の心で念仏を称えることによつて、はじめに阿弥陀仏と私が一体になるのでもない。私が阿弥陀仏に対して、一心に叫び願うことによつて、やつと阿弥陀仏が動き、我が方にやってくるのではないのである。そうではなくて、すでに、阿弥陀仏が私の心にまします。それ故に私が念仏者でありうるのである。同様に、私が一心に何かの行為をなすことによつて、私が阿弥陀仏と一体になるのではなくて、阿弥陀仏が私と一体になつていゝが故に、「南無阿弥陀仏」が私の口から称せられるのである。

ではこの真実を、私がもし、私の全人格のなかでそのごとく知りえたとしたらどうなるであらうか。それはまさしく、阿弥陀仏の大悲の中に生かされている、私自身の実相を、私が如実に覚知したということであらう。私は常に阿弥陀仏に抱かれて私の歩むところ、何時であらうと、何処であらうとそこに阿弥陀仏がまします。私の求め、心の有り様に関係無く、私は阿弥陀仏と一体である。このような自覚がここに生まれることになるのではなからうか。それは私にとつて、何というすばらしい、力強さであらうか。そこには何もものにも破られない無限の慶喜が、満ち満ちている。この私はもはや、いかなることに対しても恐れを抱かない。阿弥陀仏の中に生かされている永遠の生が、ここに開かれているのであるから、「死」そのものに対する根源的な恐怖さえも、もはや突き破られている。どのような「生」が私を襲うとも、私にはいかなる障害もありません。

このことは、私の人生に完全なる価値の転換が生じたことを意味している。自らの力で、かえつて自分を繫縛していた、旧い私が死に、阿弥陀仏に生か

されるという、全く新しい私がここに生まれることになるからである。今までの私は、思いとしては、一心に仏道を歩んでいくはずであった。けれども実際のには、その行道そのものが、ただ欲望の中に埋没している、世俗的「生」でしかなかったのである。いま阿弥陀仏に生かされて、その愚かさが如実に知らされたのだ。世俗の人生が、いかに醜く汚らしいものであるか。この世における喜びや楽しみがなぜ苦悩の原因でしかないのか。阿弥陀仏の浄土の眞実を知ることによって、穢土におけるこれらの迷いの根源を、眞に見ることが出来たのである。しかもこの私が今、浄土の眞実の中で生かされている。そこに獲信の念仏者の眞の生き様があるのである。では獲信の念仏者とは、いかなる「生」を送るのであるか。親鸞はこの点を、

金剛の眞心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超へ、必ず現生に十種の益を獲。
と示す。「横」とは、眞実の信心を獲得したその瞬間に、あらゆる障碍を一足飛びに跳び越えて、という意味で、私たちが歩んでいる迷いの道が、獲信の瞬間に断ち切られ、この現実の生活において、悟りに至る種々の利益が、必ず獲られるというのである。なぜか。私自身まさに、阿弥陀仏によって、如実に仏道を歩まされているのだからである。このことを『歎異抄』(第七条)では、

念仏者は無碍の一道なり。そのいはれいかんと
ならば、信心の行者には天神・地祇も敬伏し、
魔界・外道も障碍することなし。

と述べる。信心の行者は、阿弥陀仏と共に、仏道を歩んでいるのであるから、たとえ如何なるものが現われようとも、この道を邪魔することは不可能なのである。ではここに言う「仏道の亜佑美」とは、どのような行道なのであろうか。

大乘仏教において、仏道と言えば、大乘菩薩道以外はありえない。したがって信心の行者とは、阿弥陀仏に導かれた、眞の仏道の実践者だといわねばならぬ。彼こそ自利・利他円満の大乘菩薩道を歩む者なのである。そこで親鸞は、この眞実信心の内実を開いて、

眞実信心はすなはちこれ金剛心なり。金剛心はすなはちこれ願作仏心なり。願作仏心はすなはちこれ度衆生心なり。

と言う。信心の行者は必然的に、眞に仏になろうとする心を抱き、同時に、他の未だ迷える衆生を、自分と共に、仏果へ至らしめようとする。かかる仏道の実践者が信心の行者なのである。それは仏果に通じる大白道を、一途に進ずる仏道者の姿だといえる。そこで、この者は必ず「大般涅槃」を超証するが故に、彼は等覺の菩薩である「弥勒」と同じだとされる。そしてこの菩薩行を歩む念仏者を「眞の仏弟子」と言うのである。

信心の行者は「眞の仏弟子」である。眞の仏弟子とは、本當の意味で、彼こそが釈迦諸仏の教えに、その如く従う者という意味であらう。釈尊が彼のために、最も願って与えたその教えを、そのまま受け入れて、教えの如く実践する者が眞の仏弟子なのである。したがって「眞」は、「偽」と「仮」を最も嫌うと言わねばならぬ。仏教にとつて「偽」とは、釈尊が説かなかった教え、あるいは釈尊がそれは誤りであると言つて、斥けた教えのことである。だとすれば、仏教者が最も心しなければならぬことは、「偽」の教えに惑わされること、あるいは自身の教えを混えて、あたかも仏教のごとく実践することである。この立場から眞の仏弟子はまず、「偽」の教えを徹底的に排除するのである。

「仮」とは「かりに」という意味で、直ちに究極の目

的に達せられない者が、その目的に近づぐために、方便として「かりに」一つの場に達しておく。このように目的を得るために、かりに利用する便宜的な手だてが「仮」である。「偽」の教えの過ちに気付いた彼は、その教えを徹底的に破棄して、いまやただひたすら、仏教への学びを求めている。一心に仏道を修して、悟りに至るべく努力を重ねているのであるけれども「悟り」は、なかなか彼の眼前には現れてこない。むしろ願ひとは逆に、苦悩が深まり、迷いが大きくなっていく。このような者に対して、仏は一つの方便を説く。直ちに「悟り」に達することは出来ないが、彼自身、精進努力することが可能な道を、段階的に示して、彼をして必然的に「悟り」に至らしめようとするのである。されば、この者にとつて重要なことは、いま修している仏道は、あくまでも仏果に至るための「仮」の道であるということに、一刻も早く気付くことだと言わねばならぬ。そして自分のために開かれている、「眞」の道に出会うことが必要なのである。

この意味からしても、「仮」の仏道が捨てられない限り、この者は悟りは得られないのである。「仮」は彼が仏道を歩むためには、「まず」修すべき道かも知れないが、その道にこだわっている限り、彼は絶対に悟りには達せられない。この故に、「仮」の過ちを見抜いて「眞」に転入することが、仏道にとつて最も重要なことになるのである。阿弥陀仏の教えでは、第十九願と第二十願が仮の教えであった。これらの願の行道が、私たちにとつて、いかに悟りに達し得ない行であるかは、すでに論じたところであるしかして今や、第十八願の教えに転入せしめられる道が開かれたのである。この第十八願の教えに、まさしくそのごとく従う者が、眞の仏弟子に他ならない。

かくて真の仏弟子とは、阿弥陀仏の選択本願念仏の教えを、一切の仏道の中から、ただ一つ選び取って、この念仏に、踊躍歡喜の心で生かされていく者だといえる。それは阿弥陀仏の、この愚かなる私に対する教勅「南無阿弥陀仏」と、釈迦仏のその教えに従うことを勧めたもう教説に、一心に信順する姿でもある。そうだとすれば、この者はすでに世俗的な価値判断に惑わされなくなっていると言わねばならぬ。阿弥陀仏の教えに、完全に従っているのであるから、世俗的な幸福論は、もはや彼には無意味なものになってしまっているはずだからである。世俗的な名誉を得る、さまざまな事柄、幸福の必要条件でもある財物の豊かさ、あるいは健康と安穩無事な生活、真実の仏道から見るとすれば、これらの総ては、まさに迷いの所因でしかないのであるから、真の仏弟子が、これらの欲望に心を迷わされることはありえない。

世俗的な欲望の求めが、いかに真の慶びを歪めるものであるか。欲望の喜びが、いかに彼をして苦悩の奈落におとしめるものであるか。真の仏弟子は、この真実を如実に知るがゆえに、阿弥陀仏の教えを選び取ったのである。であるならば、彼の実践道は、世俗的欲望を満たすことを求める人生が、いかに誤りであるかを人々に示し、さらに自らも欲望的生活を完全に否定して、ただ念仏の真実、阿弥陀仏の大悲に生かされる道を大衆とともに歩むことだといわねばならぬ。自分の身を捨てても、迷える衆生を救おうとする、大悲の実践こそが、真の仏弟子の「生き様」となるのである。

※「真の仏弟子」の生き様を明らかに示してください。ただ、「難信の法」だけでは片づけられないです。次号では、「6親鸞—この不実なるもの」を記載します。

聖武天皇が目指した 鎮護国家と 奈良仏教の全盛

天前期の疫病の流行と自然災害の頻発は人心を疲弊させた。藤原広嗣の乱は貴族の天皇への忠誠を揺るがした。この律令国家の危機に際して聖武天皇が立ち上げたのが、国分寺と大仏の建立。国家の統合に成功したその手腕を探る。

監修・文 大角修氏 一九四九年兵庫県生まれ。
宗教評論家・『全品現代語訳 法華経』仏教百人一首『日本仏教全史』『日本史年表』など。

聖武天皇は寺院建立の大運道
を起こして人心を掌握した

平成二十二年(2010)、平城京遷都1300年の記念事業として平城宮跡歴史公園内に大極殿が復元された。平常宮とは平城京の宮城のことで、その最大の建物が大極殿だった。その後方が天皇の御所、前方の広場が朝廷である。天皇は大極殿に置かれた高御座(玉座)に坐し、側近の宣命使が詔を読み上げた。現在の平常宮跡は広大な広場になっているが、そこには官舎が建ち並んでいた。平常宮は平城京の中央だったが、現在は西ノ京とよばれるエリアである。西大寺、薬師寺、唐招提寺などの大寺があるが、奈良市の中心地はそこではない。東大寺、興福寺、春日大社などがある奈良公園のあたりが奈良の中心地で、当時そこは平城京の外京界限である。

平城京は中国の天子(皇帝)の都をモデルに造られた。中央の朱雀大路の北端に宮城を置く。天子は北極星のように北にあり、臣下は朱雀大路の左右の条坊に暮ら

す長方形の都なのだが、東北部に奇妙な突出部があった。そこが外京だ。

外京は藤原氏のための特別のエリアである。平城京遷都とともに藤原不比等が邸宅と氏寺の興福寺を建立した。

不比等は天皇をしのぐほどの権勢を誇ったが、養老四年(720)に没し、その四人の子が南家・北家・式家・京家の四家を興した。しかし、政権は皇親(皇族)の長屋王が担った。

首皇子(文武天皇の第一皇子で不比等の長女の宮子の子)が神龜元年(724)に即位して聖武天皇となった。あとも長屋王が政権を握り続けた。しかし神龜六年(729)、長屋王は謀反の密告によって自殺させられた(長屋王の変)。同年、藤原氏は四兄弟の妹で聖武天皇のもとに入内していた光明子(安宿媛)を皇后の位につけた。いわゆる光明皇后である。

しかし、その後も皇親勢力は葛城王(橘諸兄)を中心に権力を保った。また、唐に留学した吉備真備や僧玄昉が朝廷で重用された。そうした政争がいつそう激しくなるなかで、天平十二年(740)、九州の太宰府に左遷されていた藤原式家の博嗣が朝廷を批判して反乱を起こした。その軍勢が都に迫ることを恐れた聖武天皇は騎兵400人に護衛されて十月に伊勢方面に脱出。広嗣捕縛の知らせが届いたあとに行幸を続けて、恭仁京(京都府木津川市)に遷都。さらに紫香樂宮(滋賀県甲賀市)と難波宮(大阪市中央区)を造営し、天平十七年(745)まで六年にわたって遷座を繰り返した。皇族・貴族・官吏らも天皇に従って居を移さねばならず、忠誠が試されることでもあった。

天武天皇が「国分寺建立の詔」と「大仏造立の詔」を発したのは、その間のことである。都も定まらない不安の世に、聖武天皇は鎮護国家の経典を奉じて都と地方に大寺院の建造を呼び掛けた。それが一大国家事業にな

る。大建築によって人心を掌握するのは、古代のピラミッドも現代のオリンピックも同様であるが、壮麗な教会や寺院に見られるように、多くは宗教的情熱によって建造された。

天平勝宝四年(752)大仏開眼供養あ行われた東大寺は外京の興福寺に隣接して建てられた。大仏殿の前方には高さ100mともいう2基の七重塔が左右に建てられ、鎮護国家の奈良仏教が全盛期を迎える。その頃、都の大寺や宮中で僧100人による仁王会(護国經典の「仁王經」を奉読する法会)など四季折々の法会が盛んになった。「お水取り」と呼ばれる東大寺の修二会も始まった。

東大寺や興福寺は平安時代以後も「南都」として維持され、今も人々を惹きつける大きな文化力を保っている。

なお、鎮護国家の内容は国家安泰、病魔退散、五穀豊穡などを祈ることである。今では厄除け祈願、家内安全、受験合格祈願などに広がり、盛んである。

東大寺を国分寺の頂点に置き 中央集権国家の強化を図る

国分寺は「国(この寺)の意。その国とは大和、信濃など、古代の律令制による区分で、今も地方名として生きる。

天平十三年(741)二月、聖武天皇はその国(この寺)を建立せよと各地の国司に命じた。聖武天皇が遷座を繰り返した時期で、恭仁京での布告である。

その「国分寺建立の詔」にいう。
「天下の諸国にそれぞれ七重塔一基を造立せしめ、あわせて金光明經・妙法蓮華經一部を書写させよ。私はまた別に金字の金光明經を書写し、塔ごとに各一部を納めよう。願わくは、聖法たる仏法の威勢盛んにして、

天地のあるかぎり永く伝わり、守護の恩、生死の境を超えて恒に満つることを。その塔建する寺を国の華とせよ。(中略)僧寺には必ず二十僧を住させよ。その寺の名は金光明四天王護国寺とせよ。尼寺には十尼を置き、その名は法華滅罪之寺とせよ」

金光明經(最勝王經)は31品章の經典で、その第1品「四天王觀察人天品(人間界と天界の觀察)」で四天王は釈迦如来に「一切の衆生(人々)に安樂を与え、一切の苦惱・怖畏を除き、飢饉のときには豊作をもたらし、疾病・病苦を癒し、一切の災変、百千の苦惱を皆消滅させる」と告げる。

だ、12品の「四天王護国品」では四天王が釈迦如来に国を護ると奏上する。

四天王は世界の中心にそびえるという須弥山の四方(全世界)を守護する天の將軍たちで、東方持国天、南方增長天、西方広目天、北方多聞天(毘沙門天)である。この四天王が釈迦如来に告げた。「国土の城都や邑、町、山・林・野に金光明最勝王經が流布し、もし国王がこの經典を至心に聴受し称嘆し供養し、この經を受持する四衆(僧・尼僧と男女の信徒)に供給し、深心に擁護して哀惱から離れしめるならば、その因縁によって、我ら四天王、その国の王と諸人衆を護り、皆安穩にして憂苦を遠離し、寿命を増益し、威徳を具足せしめます」と。

妙法蓮華經(法華經)は、「釈迦如来は入滅しても真実には永遠の仏であり、この世界は大火に焼かれるような苦難に満ちていると見えても仏の国土として真実には安穩である」と告げる。そして、最後の第28品では普賢菩薩が「この經典を受持する者は、わたくしが守護して憂いと患いを除き、安穩であらしめて、悪しきものが近づかないようにします(中略)この經が読誦されるとき、わたくしは六牙の白象に乗って姿を現して守護し、その心を安んじます」と誓う。この普賢菩薩は特に読誦して懺悔し滅罪を祈る菩薩とされる。

このような經典によって国分寺・国分尼寺が建立されたわけだが、当時、多くの人に經文の意味はわからなかっただろう。しかし、仏によって国と暮らしが護られるということは話に聞き、法会を拝する機会があれば、僧尼が麗々しく読誦する大陸伝来の響きに神秘的な力が感じられたことは間違いない。

国分寺・国分尼寺は諸国の国府の近傍に建立された。両寺とも四圍を築地塀で囲み、金堂、七重塔、鐘樓などの伽藍が整然と建てられた。鐘樓では1日に6度、定時に鐘が打ち鳴らされた。

東大寺も正式には金光明四天王護国寺といい、総国分寺(国分寺の本山)とされる。東大寺を諸国の国分寺の頂点に置くことで地方支配を強化し、国家の統合を図った。

天平十九年(747)十一月、聖武天皇は遅れている国分寺と尼寺の建立を国司に督促するとともに、「郡司で力がある者に造寺をまかせよ。3年以内に塔・金堂・僧坊の建設を終えれば子孫は絶えることなく郡の役人に任じる」と布告。

一種の利権がらみの政策である。その年には大仏の鑄造が始まり、さらに巨額の寄進があつて、史上初のバブルともいべき高潮が生み出された。

編集後記(愚案)

吹く風を受けて

散る花 ひらく花

「このころのともしび」令和七年四月

「時の流れに身を任せ」「川の流れるように」とか思い浮かべますが、吹く風を受ける時、処、そして人によって、受け取り方は違ってきますのでありましょう。阿弥陀さまのご本願の流れに任せられるのが「他力をたのみたる」ことなのでしょう。それが「生かされている」と領けられるのでしょうか、そうはなれない私は、「誹謗正法」なのかと思いつつも、親鸞聖人の領解とはほど遠いです